令和５年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（こども家庭庁）
指定保育士養成施設及び実習先保育所の実習指導担当者に対する
効果的な研修の在り方に関する調査研究

保育実習指導マニュアル

養成校版

令和５年度版

一般社団法人 全国保育士養成協議会

目次

はじめに …… **1**

Ⅰ．実習前 …… **2**
1．実習への理解を促す
2．学生が実習目標を考える

Ⅱ．実習前から実習中 …… **4**
1．記録（実習日誌）を書く意味を伝える
2．学生に学んでほしい内容によって記録（実習日誌）の書式を選ぶ
3．学生が学びたい内容によって部分･責任実習の方法を選ぶ
4．今後にむけた ICT の活用
5．保護者支援を学ぶ

Ⅲ．実習中 …… **8**
1．訪問指導を実習指導のプロセスの一環にする
2．実習施設と一緒に学生を育てる

Ⅳ．実習後 …… **9**
1．保育を振り返る行為を共有する
2．「何が良くて何が課題なのかが分かる」ように評価を伝える

＊文中のたとえば：★「実習指導の工夫」、●「実習施設（養成校）との連携」、◆「補足情報」
＊より確実にこのマニュアルをご活用いただくために、各ポイントにチェック欄を設けています。ぜひご活用ください。

はじめに

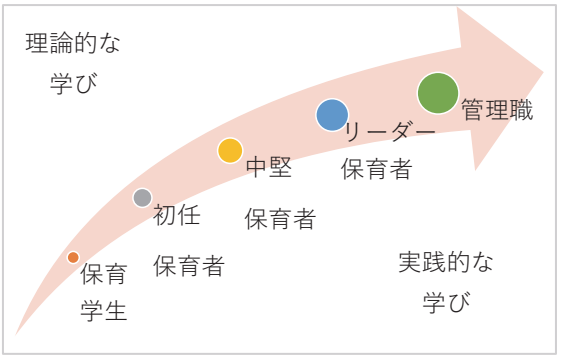
実習指導は、①事前指導、②実習中の指導、③事後指導によって成り立っています。①事前指導、③事後指導は主に養成校の実習指導者、②実習中の指導は主に実習施設の実習指導者が担うことになりますが、学生にとってこれらの学びは連続性のあるもので切り離せるものではありません。より良い実習指導を進めるために、養成校と実習施設が一連の実習指導の内容を共通理解し、協働して取り組んでいくことが大切です。

保育者としての育ちと実習

養成校では授業を通して理論的な学びを、保育現場では実習を通して実践的な学びを中心に行います。保育者になるためには、保育に関する理論と実践の学びを往還しながら進めていくことが必要です。そして、保育者になってからも、理論と実践の往還的な学びを続け、その専門性を高めていくことでしょう。

保育者としての育ちは養成段階から始まっています。良い形で保育者としてのキャリアのスタートをきることは、実習生の保育者になりたいという思いを高め、希望をもって保育者としての道のりを歩んでいくことにつながるでしょう。

保育者としての学びと成長



学びの主体である実習生

保育の主体が子どもであるように、実習においては実習生が主体になります。実習生は指導する側から見ると指導される存在ですが、実習においては学びの主体として実習生の存在を捉えていく視点が重要です。そのことは、将来、主体的な保育者を育てることにつながるでしょう。

実習生理解から始まる実習指導

学びの主体である実習生を指導する際に求められることは、実習生理解です。対象者理解なしに良い指導はできません。時に実習生の理解が難しいと感じることもありますが、実習生がそれまで過ごしてきた背景や生活経験等に目を向け、世代の違いを超えて理解していこうとする姿勢が大切です。養成校と実習施設とが実習生の姿を共有しながら、理解を深め、協働して一人の保育者を育てていきましょう。

Ⅰ．実習前

１．実習への理解を促す

実習に行く前に、学生が“実習とはどのようなものなのか？”その意義や目的を理解し、実習での学びについてイメージできるよう指導していくことが大切です。

□ポイント１　実習の段階と内容を示す

保育所等における実習には、保育実習Ⅰと保育実習Ⅱがありますが、それぞれ実習の段階も内容も異なります。学生が見通しをもって学べるように、実習がどのように進められていくか「実習の段階」、どのようなことを学ぶか「実習の内容」を事前に伝えましょう。

□ポイント２　保育所等への理解を深める

保育所等について学生は様々な科目の中で学んでいます。他科目と連携しながら、事前指導の中でも保育所等への理解を深められるようにしましょう。

実習では学生が保育現場に参画して学んでいくことになるので、学生でありながら保育者としての姿勢が問われます。子どもの最善の利益を考慮する保育の実践を追究している保育現場の理解が必要です。子どもたちがどのように園生活を過ごしているのか、保育者が何を大切に保育しているのか、学生がその思いを尊重して実習に臨むことができるようにしましょう。

たとえば･･･実習施設との連携･実習指導の工夫

●保育士をゲストスピーカーとして招き、保育現場の話を聴く機会を作る
　ICT の活用　⇒オンラインで保育現場と養成校の教室をつないで講義することも可能
★実習を経験した学生から、戸惑ったこと、事前に学んでおくと良かったことなどを聞き取り、次年度の実習指導に活かす

□ポイント３　実習へのイメージ

具体的な実習のイメージを学生が持てるよう指導することが大切です。具体的なイメージが持てることで、学生は学びたいことや体験したいことなどを思い描くことができ、実習に対して意欲的になれるでしょう。

たとえば･･･実習指導の工夫

★実習の様子の動画（教材用 DVD 等）を視聴する機会を作る
★先輩から実習の体験談を聴く機会を作る
　実習報告会への参加、実習報告書の閲覧、先輩との交流　等

２．学生が実習目標を考える

学生一人一人が、実習で“何を学びたいか”、“何を体験したいか”を考え、実習の目標を明確にして、実習に臨めるよう指導することが大切です。学生が実習目標をもって、主体的に実習での学びを進めることができるように指導しましょう。

□ポイント１　実習の段階と内容を確認する

行う実習の段階と内容を明示し、学生が理解したうえで実習目標を考えることができるようにしましょう。

□ポイント２　これまでの学びを整理し、学生の関心を引き出す

学生がこれまで授業等で学んできたことを振り返り、一人一人がどのようなことに関心を持っているのかを引き出しましょう。学生の関心をもとに実習目標を考えるよう指導し、学生一人一人の学びの充実につなげましょう。

たとえば・・・実習指導の工夫

★学生同士で「実習目標」を発表し、学び合う
★養成校内の教員と連携して、学生一人一人と対話しながら実習目標を考える

□ポイント３　実習施設に実習目標を伝える

学生が立てた実習目標は、実習オリエンテーション時に持参し、学生から直接、実習施設の実習指導者に伝えるよう指導しましょう。“何が学びたいか”を伝えることで、可能な範囲でその学びを実現できるような実習計画を園が立ててくれるでしょう。このことは、学生の主体的な学びを実現する上でとても大切です。

たとえば・・・実習施設との連携

●実習施設には、学生が「実習目標」を持参することを事前に伝えておく
　可能な範囲で実習計画に組み込んでもらえるよう依頼する

３．実習施設に養成校の実習計画を事前に説明する

実習の目的や段階、内容、スケジュール等の実習計画について、実習施設に説明しておきましょう。

ポイント　養成校のカリキュラムにおける実習の位置づけを伝える

養成校においてどのような保育士を養成しようとしているのか、そのためにどのようなカリキュラムを編成し、どのような実習を計画しているのかを、わかりやすく伝えると良いでしょう。

たとえば・・・実習施設との連携

●養成校で作成している「実習の手引き」等を実習施設に送付したり、養成校に実習施設を招いて
　交流したりする機会をつくる

Ⅱ．実習前から実習中

１．記録（実習日誌）を書く意味を伝える

実習をより充実したものにするうえで、記録は非常に大切です。一方で実習生が最も負担を感じるものでもあります。いま一度、もし、「実習生だからこれぐらいの量を書くのは当たり前」、「以前の学生はもっと書いていた」などの考えがある場合は見直し、記録を書くことの意味を考えてみることが大切です。

□ポイント１　記録することで「保育を可視化」する

記録をすることで、「子ども理解が深まる」、「振り返りによる気づきを得る」、「自らの課題に気づく」といった学びが得られることを、学生が理解できるように指導しましょう。

□ポイント２　保育の過程を理解する

実習においても、保育実践における PDCA サイクルに位置づけて、記録を考えることが大切です。

たとえば･･･実習指導の工夫

★何のために記録するのか、記録することがどのような学びを裏付けるのか詳しく伝える
★記録に対する不安感を減らすために、具体的な書き方や表現の仕方を指導し、個別に添削するといったフィードバックを行う
★実習事前指導において学生同士で自身が作成したこれまでの記録を発表し、学び合う

２．学生に学んでほしい内容によって記録（実習日誌）の書式を選ぶ

学生に学んでほしい内容によって、記録の書式を変更することも大切です。実習の時期や園の状況、実習生の実習目標などに応じた柔軟な選択ができるようにしましょう。養成校と実習施設の間でどのような記録が学生の学びにつながるか協議する機会をもつことも大切です。

たとえば･･･実習指導の工夫

★保育実習Ⅰ（保育所等）では、初めての実習体験である場合も多いため、「一日の時系列記録」を丁寧に書けるように指導する
★保育実習Ⅱの実習後半や保育実習Ⅰと保育実習Ⅱが同一の実習施設で実習を行う場合は、「エピソード記録」「ドキュメンテーション型記録」などの割合を増やす
★学生の負担を減らすため、ICT を積極的に活用する

さまざまな記録様式の特徴と学生が学ぶことができる内容・実習指導者の配慮点

記録様式	○学生が学ぶことができる内容　☆実習指導者の配慮
一日の時系列の記録 特徴：一日の流れに沿いながら「環境構成」「子どもの活動」「保育者の援助」「実習生の援助や気づき」などを記入	○子どもの一日の流れと保育士等の業務の全体像を理解する ☆すべてを詳細に記録することは読み返した時に分かりづらくなる場合や実習生の負担も大きいため、実習生の一日の目標や課題を考慮し、着目する点や場面をある程度絞って記述できるように指導することが大切となる
エピソード記録 特徴：その日に印象に残った保育場面を抽出してエピソードとして取り上げ、感じた思いや考察を記入	○実習生が自ら選んだ保育場面を記録し、考察を加えていくことで、子どもの行動の理由、保育者の援助の意図、その後の展開といった一連の流れを文脈的に捉える ☆実習生が自身の気づきを意識化できるように、記録の中でよかったことを伝えたり、対話を通して実習生の記録の意図を聴き取り、子どもや保育の理解が進むような具体的な内容を伝えることが大切となる
保育環境を図示したマップ型記録 特徴：保育環境図に子どもの遊びの様子を書き込み、そこで展開する子どもの経験を記入	○子どもの遊び方、子ども同士の関係性、子どもと空間の関係等を俯瞰的に把握する ☆保育状況の多面的な理解が求められるため、実習生がある程度実習経験を重ねているかどうか考慮することや、園の子どもの状況も、ある程度、遊びや友達との関係性が継続する状態である場合に導入することが大切となる
ドキュメンテーション型記録 特徴：子どもの学びを写真などで可視化し、子どもや保育士・保護者等と対話するための資料	○単に記録をするだけではなく、記録を行う過程において、子どもや保育士等と対話し、学びのプロセスを理解する ☆保育中に写真を撮る場合が多く、写真を撮ることが目的にならないように指導することや、データ管理の方法を伝えることが大切となる

３．学生が学びたい内容によって部分・責任実習の方法を選ぶ

部分・責任実習というと、「一斉活動」の場面でなければいけないと思いがちです。学生が学びたい内容によって、部分・責任実習の方法（保育方法）を選択できるように、実習施設と連携していくことが大切です。

□ポイント１　様々な部分・責任実習の方法（保育方法）を理解する

保育者は、子どもに経験してほしい「ねらい」「内容」によって、クラス一斉で行なうのか、やりたい子どもが参加するのかなど、保育方法を工夫しています。学生にとっても、部分・責任実習をどのような方法で行なうのかによって、学ぶことができる内容が異なります。複数の部分・責任実習の方法（保育方法）について、学べる内容と共に、事前に伝えましょう。

□ポイント２　実習施設と連携する

「実習だから『一斉活動』を経験できるようにしなければ」と考えている実習施設も少なくありません。養成校から積極的に実習施設に働きかけ、連携をとることで、学生が学びたい保育方法を経験できる環境を整えるようにしましょう。

□ポイント３　学生が実習園の全体的な計画や指導計画を理解する

学生が全体的な計画や指導計画にふれる機会はなかなかありません。実習において全体的な計画の位置づけや内容を理解し、部分・責任実習に活かすことができるように、全体的な計画や指導計画を学生に提示してもらえるように、実習施設に働きかけましょう。

たとえば・・・実習方法の例

★思い思いに遊ぶ時間に、学生が一つのコーナーを担当する
★０歳児クラスの一人の子どもを学生が担当する
★子どもに提案する制作を数日にわたり継続して作る活動を担当する

＜学生主体の実習ができるように実習施設にどのように働きかけますか＞

学生はわからないことが多く、とくに実習の初期段階では今どこにいればよいか、何をすれば良いかすらわからず不安になるものです。これから何をするのか、どうしてほしいのかを学生に一言伝えてもらえるだけで、学生は「わからない」状況から、「動いてみよう」という思いに変わるようです。学生が主体的に保育に参画し学ぶために必要な情報をさりげなく伝えてもらえるように、養成校から働きかけましょう。

事例　“さりげない一言の指導”で主体的に学ぶ実習生

“春を探しに散歩にいきましょう！”

３歳児クラスでの実習２日目のことです。前日に一日の保育の流れは理解したものの、まだわからないことも多くＡ実習生は周囲を注意深く観察しながら、子どもたちや担任保育士の動きに合わせて動くのに精一杯の様子です。朝の集会を終えて、「今日はあたたかいからお散歩にいこう」とＢ保育士が子どもたちに声をかけると子どもたちはテラスに移動します。Ａ 実習生も子どもたちと一緒にテラスに向かいました。すると、一緒にテラスに出てきた Ｂ 保育士が Ａ 実習生に「今日は春を見つけることがねらいです。春を探しに散歩に行きましょう」と声をかけました。

子どもたちは園庭の門の前に並んで散歩に出かけるのを楽しみに待っています。Ｂ保育士は、「Ｃ先生は真ん中を見てくれるので、Ａさんは後ろをお願いします」と Ａ 実習生に声をかけました。すると、Ａ 実習生は安心したように列の後ろの子どもたちの横について、一緒に散歩に出かけました。散歩の途中では、Ｂ 保育士が「あの木の枝、ちょっとみて」と子どもたちに言葉をかけます。「あっ、なんだかぽつぽつしてる」と木の枝の芽吹きを見つける子どもたち。Ａ 実習生も、「あ、葉っぱだよ」、「この実はなに？」とつぶやく子どもの声に耳を傾け、春探しを一緒に楽しみました。Ａ 実習生の表情も和らいでいます。

ポケットや手のひらにたくさんの春のお土産をもって園に戻りました。散歩の途中で見つけた木の実をＤちゃんは握りしめています。Ａ 実習生も同じ実を持っています。Ａ 実習生は、Ｄ ちゃんを誘って保育室にある図鑑を開きました。「何の実かな？」と、Ｄちゃんも、Ａ実習生も興味津々、楽しそうです。

４．今後にむけた ICT の活用

近年、保育現場においても ICT の活用が進んでいます。実習日誌の記入においてもルールを明確にしながら、その活用を進めていくことが求められています。

たとえば・・・実習施設との連携

- 養成校と実習施設の間で ICT 活用のルールを決めておく
- 養成校と実習施設の間で了解が得られれば、学生に記入用フォーマットを配信する
- 実習施設で導入されている ICT ツールがあれば、その仕組みを学ぶ機会を提供する

５．保護者支援を学ぶ

保育実習Ⅱの授業内容では、「入所している子どもの保護者に対する子育て支援及び地域の保護者等に対する学び」が位置づけられています。このことは、実習生が直接、保護者に関わるといった経験が難しい場合も考えられますが、実習施設のさまざまな支援のあり方を学ぶ機会を設けることで学びの場を提供することが求められます。

たとえば・・・実習施設との連携

- 登園や降園の際、保育士等の保護者への関わりを学べるように実習施設に依頼する
- 園だよりや連絡帳といった園が作成する保護者向けの記録を見る機会を持てるようにする
- 施設長や主任保育士など保護者支援に携わることが多いスタッフにインタビューを行う時間を設ける
- 子育て広場など併設している場合、実習プログラムに組み込めるようにする

＜こんな時どうしますか？＞

事例　一貫しない実習指導

“先生によって指導されることが違う…”

ある日、学生から次のような相談を受けました。「実習日誌を細かく書いたら、B 先生からもっと要点をしぼって簡潔に書くようにと指導をされました。次の日、簡潔に記入した日誌を提出したら同じクラスの C 先生にはもっと詳細に書くようにと指導を受けました。どうしたらいいでしょうか

実習施設からの「一貫しない実習指導」について、学生から相談を受けることも少なくありません。訪問指導等において、学生の思いや考えを実習施設に橋渡し、連携をとることで、学生の不安感や困り感を解消することも、訪問指導担当者の重要な役割です。

Ⅲ．実習中

１．訪問指導を実習指導のプロセスの一環にする

訪問指導は、実習後の実習指導や学生指導にも活かされることが大切です。実習科目担当教員と訪問指導教員が連携することで、学生が次の実習への課題を明確にすることにもつながります。

□ポイント１　実習前・実習中・実習後をトータルで指導する

学生の実習をより良いものにするためには、実習前・実習中・実習後をトータルで指導できるように体制を構築し、教員間で学生理解や指導内容等の情報共有が求められます。

□ポイント２　教員間で共通理解を図る

様々な教員の専門性を活かしながらも、実習指導や実習施設への理解を図り、学生一人ひとりが学びのある実習となるように教員間で共有や連携をしていくことが大切です。

たとえば・・・教員間の連携

- 実習科目担当ではない教員の専門性を活かすことで ICT 化を実現する
- 保育実習ⅠとⅡ、教育実習とも連携できるようにする

２．実習施設と一緒に学生を育てる

実習施設と連携しながら、「保育士養成」について共通の理解をもつことで、実習が実習生にとってのよりよい学びにつながります。訪問指導は、実習生への理解を深めたり、実習施設と共通理解を図ったりする重要な機会と考えましょう。

□ポイント１　訪問指導を実習施設とつながる機会にする

訪問指導は、実習施設の職員と直接対話ができる機会でもあります。養成校の指導内容や考え方について、実習施設に積極的に発信するようにしましょう。特に、日誌の書き方や書式の使い方、部分・責任実習の進め方について、学生の学びたい内容も考慮しながら、実習施設と共通理解が図れるようにしましょう。

□ポイント２　学生への理解を深める

学生の普段の姿や学生理解について、積極的に伝えることが大切です。実習施設は、実習生への理解を深めることにつながります。また、実習中の学生の姿や、成長したところ、課題等を確認し、実習後の指導に活かしましょう。

たとえば・・・実習施設との連携

- 訪問指導の際、学生と落ち着いて対話ができるように、実習施設にお願いする
- 必要に応じて、学生と実習施設、両者の思いや考えをつなぐ

Ⅳ．実習後

１．保育を振り返る行為を共有する

実習後に、養成校の教員や仲間と共に、学生が自分の実習を振り返ることは、子どもの理解を深めたり、援助方法を模索したりすることにつながります。

□ポイント１　学生一人ひとりが自分の実習経験を語る機会をつくる

事後指導の授業等において、自分の実習経験を教員や仲間に語ることは、実習で得られた学びを振り返ることにつながります。教員や仲間からのコメントや、仲間の実習経験を聞くことで、多様な視点で子ども理解したり、援助方法を模索したりすることにつながります。

□ポイント２　振り返ることで「保育を可視化」する

実習後に、実習の振り返りを書くことは、「保育を可視化」することにつながります。書いたものを介して、教員や仲間と、「保育を可視化」することを共有することもできます。

たとえば・・・実習指導の工夫

★訪問指導の担当教員が、実習後に、個別に実習経験を聞く機会をつくる
★10 人程度のグループごとに、教員と学生が実習での学びを語り合う機会をつくる

２．「何が良くて何が課題なのかが分かる」ように評価を伝える

実習施設の評価票は、学生が次の実習や就職後の課題を知るための大切な資料です。学生が、「何が良くて何が課題なのか」が明確に分かるように評価を伝えることが大切です。

□ポイント１　評価票に記載されている言葉を分かりやすく伝える

実習施設には、数字で表現されている評価の理由を、具体的に書いてもらうように依頼しましょう。評価の理由が具体的に書かれていれば、実習生に評価を伝える際、「何が良くて何が課題なのか」を明確に伝えることができます。

□ポイント２　学生への評価の開示の仕方を実習施設に伝える

実習施設は、学生への評価の開示の仕方や、実習評価が単位取得や資格取得にどのように影響するのか不安になることも少なくありません。実習施設が安心して評価をつけられるように、事前に具体的に伝えるようにしましょう。

一般社団法人全国保育士養成協議会

令和 5 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業（こども家庭庁）「指定保育士養成施設及び実習先保育所等の実習指導担当者に対する効果的な研修の在り方に関する調査研究」

発行　令和 6 年 3 月 31 日

編集担当　小櫃智子　（東京家政大学）
小原敏郎　（共立女子大学）
齊藤多江子　（日本体育大学）